

The ALL Rooms スタッフの言語習得と認識

教育推進総合センター

濱田 陽

The Perception of the ALL ROOMs staff in terms of language learning and their job

Yo HAMADA

概要：これまで、全学センターの英語自律学習促進施設として機能してきた The ALL ROOMs であるが、本稿では、これまでの報告とは視点を変え、利用者ではなく The ALL ROOMs を運営する学生スタッフに焦点を当てて、報告する。The ALL ROOMs の学生スタッフは高度な英語力を身につけ、他の学生の模範的存在であるが、本報告の目的は、学生スタッフの貢献度と認知度を高める事である。彼らが、英語の習得に対してどのような認識を持っているか、そして、学生スタッフとしてどのような認識を持ち合わせているかを調査した。そのうえで、今後の検討課題を整理したい。

1. はじめに

秋田大学では、独自の self-access center である語学学習施設 The ALL ROOMs を 2010 年度に設立した。(詳細は、濱田, 2013; 2016; Grafström, 2014; 2015) その後、積極的に活動を継続し、現在では学内での認知度も上がり、学外での認知度も少しずつ上がってきている。学生スタッフの採用・育成も軌道にのり、The ALL ROOMs を運営する学生スタッフは、高い英語能力を身につけ、現在もなおその語学力を磨き続けている。本研究では、その学生スタッフを対象として、彼らがどのような方法で英語を学習し、英語習得に対してどのように考えているのかを調査することとした。また、学生スタッフには、高い語学力だけでなく、スタッフとしての資質も求められている。彼らがどのような認識を持って日々スタッフとして活動しているのかについても調査することとした。そのうえで、今後の The ALL ROOMs の課題・展望についても考えたい。

2. The ALL ROOMs とは

The ALL ROOMs とは、The Autonomous Language Learning ROOMs の略称で、現在多く

の大学に併設されている self-access center の一種である。秋田大学の学生支援棟二階に設置され、公用語は英語のみ、メインの English ラウンジと、個別学習を行うことができる3つの個室から構成される。留学生3名と日本人数名の計10名程度の学生スタッフと教育推進総合センター教員2名からなる運営チームが活動を運営している。学生スタッフは、シフトを組んで、メインの English ラウンジに常駐する形をとっている。訪れる学生は、本学の学生であれば回数にも制限はなく、好きなだけ利用できる。学生スタッフの常駐する営業期間は、原則学期中のみで、長期休業中は、個別学習ルームのみ、希望者が利用できる。

3. 学生スタッフの採用と育成

学生スタッフの採用は、例年12月中旬に行っている。多くの場合は、The ALL ROOMs を利用している学生の中で、スタッフになりたい意思を示した者が応募する。選考をもとに、例年、卒業する学生の数相当の採用をする。2月に宿泊型のスタッフトレーニングを行い、4月からは一人前のスタッフを目指して、OJT (On the Job Training) で先輩スタッフと同様にシフトに入っ

て活動を行う。学期中は、月2回、ランチミーティングを行い、日々の活動や課題の整理を行う。運営の基本的方針としては、毎年変わっていく利用者に応じて対応していくことが求められるため、いい伝統は受け継ぎ、新しい風は積極的に吹かせていくという方針である。

4. 研究の背景と目的

本研究の目的は、The ALL ROOMsの発展に欠かせない存在であった学生スタッフに焦点を当て、彼らがどのように語学学習者としての模範となったのか、またスタッフとしてどのような事を考えているのかを調査することである。さらに、学生スタッフの存在と価値を明確にすることを通して、The ALL ROOMs学生スタッフの地位の向上を図る。

研究課題は二つ設定した。一つは、学生スタッフの英語力に関して詳細分析することで、二つ目は、学生スタッフの、スタッフとしての認識を調査することである。

4-1. 参加者

本研究の参加者は、The ALL ROOMsに現在学生スタッフとして採用されている大学院生2名、四年生3名、3年生4名の計9名である。全員、英語学習への動機は高く、日常会話には問題ない英語コミュニケーション力を身につけている。出身は、6名が東北の出身で、3名が関東圏である。所属学部は、国際資源学研究科、教育文化学部、理工学部の3学部・学科であり、英語を専攻している学生は少数派である。卒業までに最低でもTOEICの860点は取得することを基本としている。現在の学生スタッフの最高点は970点である。

4-2. 調査方法

本調査は、質問紙法を用いて行った。理由は、面接法の場合、調査者(The ALL ROOMs運営者)と学生スタッフの関係性により、直接伝えるのがはばかれる内容等がある可能性を考慮してのことである。記述式質問紙法であれば、少なくとも面接法よりは間接性が生まれ、熟考したうえで回答できるため、よりの確な表現と率直な意見を聞くことができると考えたからである。

アンケートは17項目からなり、最初の7項目は、回答者の属性・英語力等を質問した。残りの10項目の前半5項目では、英語学習について以下のように質問した。

1. 英語学習の目的は何ですか
2. 英語学習で成功するために必要なものは何だと考えますか
3. 英語学習において用いている中心となる学習方法を教えてください
4. 英語学習に対する自分の基本方針を教えてください
5. 自分の英語力のスタッフになってからの変化を自己分析してください

後半の5項目では、スタッフ観に関して以下のように質問した。

1. スタッフはどうあるべきだと思いますか
2. スタッフに必要な資質は何だと思いますか
3. スタッフとして働く上で直面した問題について教えてください
4. スタッフになってからの自分の変化を(英語力以外)で分析してください
5. これから自分がスタッフとしてしなければならないと思っていることは何ですか

分析方法は、回答者・設問数が少ないことと、匿名性の保持・部分的に回答者から使用を許可されていない箇所があるため、特殊な分析方法は用いず、重要な点を抽出して解説していく形式をとる。特に、前半の7項目は個人の特定につながる恐れがあるため、大部分を割愛する。

5. 結果と考察

以下、学生スタッフの英語に関する認識とスタッフに関する認識について報告する。

5-1. 英語に関する認識

5-1-1. 英語学習の目的は何ですか

主に、コミュニケーションツールとして英語を身につけるため、趣味、良い仕事を得るため等、一般的な回答が見られた。しかし、中には、人として成長するためという、英語を通して自分を高めるとい、英語が単なるツールであるという見方を超えた発想をしているスタッフも存在する。また、学生スタッフとして高度な英語を身につけ、

操らなければならないという The ALL ROOMs スタッフならではの回答もあった。

5-1-2. 英語学習で成功するために必要なものは何だと考えますか

英語自体に興味を持つこと・語彙を増やす事・使う機会・言語使用の機会等、一般的に研究で報告されているような内容が回答としてあった。その一方で、英語という言語そのものを超えて、継続的に続ける事・積極性と忍耐強さという、精神的な強さやタフネスが必要と考えるスタッフも存在する。さらに、継続する事の出来る環境が必要、という The ALL ROOMs スタッフならではの回答もあった。学生スタッフの多くは、初めは一般的な「普通の」学生であったが、継続して The ALL ROOMs を訪れ、次第に英語が流暢になった学習者たちであるため、The ALL ROOMs という環境の力には皆が賛同すると思われる。

5-1-3. 英語学習において用いている中心となる学習方法を教えてください

予想通り、実際に英語を使うことと映画やドラマ等を見る事という回答が多かった。他にもシャドーイングやディクテーションという具体的な学習方法に関する回答もあった。資格試験勉強という回答もあったが、逆にテキスト系の学習は自分には向かなかったという回答もあった。また、「The ALL ROOMs に行くこと」という The ALL ROOMs スタッフならではの回答もあった。これは、前述の環境説と深いつながりがあり、英語が公用語であり、意識の高い人が集まる The ALL ROOMs に居ることが、最も近道であるという、他の学生への示唆ともいえる。

5-1-4. 英語学習に対する自分の基本方針を教えてください

英語学習観は多種多様と言われるように、英語学習に関してはある程度多くの事に共通認識を持っている学生スタッフの中でも、この質問項目に対しては回答が様々であった。英語学習の先に何かがあるべきであり、英語を勉強することが目的とならない事、という回答から始まり、日々使用する事・楽しむこと・先を見据えて継続する事・英語を使う環境に身を置くこと・とにかく話す事・

英語はツールであってコミュニケーションとは別物、等多種多様であった。これは、学生スタッフの多様性を示しており、同時に、多様な学生が集まる The ALL ROOMs にとっては好ましい傾向であるといえる。

5-1-5. 自分の英語力のスタッフになってからの変化を自己分析してください

この質問に対する回答は、興味深いものであった。なぜなら、英語が堪能な学生スタッフといえども、自分の変化に対しては、The ALL ROOMs 運営者である著者が客観的に発見してきている変化が個人個人にはまだ感じられていないという印象を受けたからである。主要な回答は、スピーキング力やリスニング力であった。他に、ジョークが理解できるようになった、詳細を話したり、簡単な英語で話したりすることができるようになった、語彙・文法・発音・ライティング力が伸びた、流暢性が伸びた、等があった。しかし、自分の英語力には大きな変化を感じることができないという回答も目についた。5-1-4にも、英語学習は結果が見えにくいいため、結果ばかりにこだわらず、継続することが重要という回答があったように、英語学習は目に見える飛躍が見えにくい。著者の観察では、確実にスタッフになってから皆リスニング力とスピーキング力は向上しており、スタッフになった当時とは比較にならないほどの上達であるが、当の本人達は著者ほど気づいていないのである。それ故に、客観的に、スタッフに著者が向上と今後の課題については適宜可視化・助言をしていくべきだと考える。

5-2-1. スタッフはどうあるべきだと思いますか

前述5-1-5. の回答と一転して、この問いに対しては多くのスタッフが似たような見解を持っている。共通するのは、スタッフの中に、英語だけでできればよいと思っている者はいないということである。そして、英語力は当然、人間性も持ち合わせていなければならないというのが多くの見解である。これは、学生スタッフが、英語はあくまで何かの媒体としてのものであり、人間性・性格といったものがより重要であると考えていることの表れだと考えられる。中に、人間性・性格：英語力 = 6.5 = 3.5 という回答があった。英語が堪

能な学生がこのように考えているのは、まさに英語学習者としてのあるべき姿である。また、他の学生の模範としてあるべきと、多くのスタッフが考えている。The ALL ROOMs は自分の英語をひけらかす場所ではなく、他の学生とともに成長する場所であるため、フレンドリーさは重要な要素であり、周りとの協調性が重要と考えられている。本学の特徴として、他の self-access center を併設している大学と異なり、英語や外国語専攻の学科の規模は小さく、多種多様な専攻が存在する総合大学である。The ALL ROOMs 学生スタッフ間では、英語＋専門性を打ち出しており、英語だけで中身がなければ意味がないとの共通認識を持っている。それを代表する回答として、英語以外にも何かに目標を掲げて努力をしているべきである、という回答が見られた。その姿を見て、英語を専門としない学生も、自分も英語に挑戦できると思ってくれることを願っていると記述されている。

5-2-2. スタッフに必要な資質は何だと思いますか

この項目には様々な回答があった。列挙すると、コミュニケーション力・話の引き出しの多さ・英語力・他の人のために働くという気持ち・人に厳しく注意できるか・創造性・リーダーシップ・周りを見る力・他人への寛容性と思いやり・利用者に好かれる人柄・努力し続ける力などがあがったが、何よりも協調性を重要視する意見が多かった。学生スタッフは、様々な学部や背景の人々の集まりであり、考え方も多種多様であるという良い面もある一方、協調性なしではそれらはマイナスに働いてしまうため、チームとして活動するために、協調性はキーワードであり、今後も学生スタッフの採用の際には明確に強調していきたい。

5-2-3. スタッフとして働く上で直面した問題について教えてください

回答は大きく二つから構成されていた。一つは、利用者との接し方で、もう一つは、スタッフ間の問題である。利用者との接し方では、どのように会話を続ければよいのかに戸惑った・自分の専攻の後輩をどう惹きつければよいか困っている・自分より英語力のある利用者と話す事に抵抗があ

る、という回答があった。スタッフの一回のシフト時間は90分であり、この間、利用者惹きつけ、話を巧みに引き出していくためには、それ相当の英語力とコミュニケーションが必要である。確かに難しいことであるが、The ALL ROOMs は、利用者だけでなく学生スタッフ育成の場でもあるため、この経験から各自が何かを身につけていくことを望む。後者の、スタッフ間の問題に関しては、留学生と日本人スタッフの基本的背景も異なるため、その折り合いをどうつけるか、そして、日本人スタッフ間でも、モチベーションに差があったり、考え方が異なったりするという回答も見られた。前述のように、違いをマイナスとは考えず、お互いがそこから新しいものを創造していくという、5-2-2でスタッフの資質としてあげられた「創造性」が重要となるであろう。また、これは学生だけの問題ではなく運営する教員もチームをまとめる役として一緒に向き合っていくべき問題である。

5-2-4. スタッフになってからの自分の変化を（英語力以外）で分析してください。

この質問項目は、著者の求めるThe ALL ROOMsの学生スタッフ像として最も重要な項目である。回答は多種多様で、相手への思いやりが増え、相手の考えている事・気持ちを考えるようになった・自分について人に話せるようになった・コミュニケーション力がついた・礼儀正しくなった・視野が広がった・物事を考えるようになった・英語力に自信がついた・自分のコミュニケーションにおける長所・短所に気づいた・毎日が楽しくなった・笑うようになった等が挙げられた。スタッフには、日ごろから高度な英語力を身につける事は当然であり、その先に何があるかを強調している。一人一人が、自分の中で考え、時に葛藤し、人間的に変化が生まれてきていることが見て取れる。中でも、人の事を考えるになったという回答が複数あり、これからスタッフが卒業後生きていくことの武器となる重要な部分であるはずである。同時に、以前より礼儀に気をつけるようになったということも、社会で生き抜くために重要なスキルである。The ALL ROOMsは一つの小さな社会で、今後も、本学の立派な学生を輩出する小さく偉大なコミュニティーを目指していきたい。

5-2-5. これから自分がスタッフとしてしなければならないと思っていることは何ですか。

この質問項目も回答は二種類あり、一つは利用者に関する事、もう一つは自分自身の英語に関する事であった。まず、利用者に対しては、楽しんで英語を学ぶ手助けをしたいという回答から始まり、自分が学んできたことを共有したいという回答も複数あった。つまり、これから、使える英語を学ぶ利用者に対し、既にその道を通ってきたスタッフが効果的に手助けをする、また、人としても何か刺激を与えたいという意識の表れだと解釈できる。そして、スタッフ自身が自分の英語力の向上をしなければならないと思っていることが伝わった。歴代の The ALL ROOMs スタッフの多くは、TOEIC860点を最低でもクリアし、そのこと自体に重きはおいていないという伝統がある。つまり、TOEIC はあくまで英語力の一部の指標で、決して全てではない。その先に何かあるかをしっかり見据えて、現スタッフには奮起を促したいと考えている。

6. 今後の計画

2010年度から続く The ALL ROOMs を支えてきたのは学生スタッフといっても過言ではない。既に高い英語力と人間性を備えた多くのスタッフが社会で活躍している。今後の計画として、人間性・英語力の伸び白を備えている現スタッフのさらなる英語力の向上として、個に応じた指導も取り入れていきたい。そして、既に過去に取り入れているように、県内高校に出向いての学生・教員によるワークショップ、県内高校生のアメリカ・ミネソタ研修の事前研修への協力等、学生スタッフの優秀な力を対外的にも広めていきたい。学内では、昨年度から開始したイングリッシュマラソン（濱田・ベセット・グラフストロム・タッカー、2018）への協力を増やし、学内外でのさらなる認知度・知名度の向上を図っていきたい。

7. おわりに

The ALL ROOMs はこれまで、多くの人に支えられて運営を続けられている。学生スタッフは、その中の中心にあり、厳しい状況で英語力を磨き、その人間性も育み、利用者・大学に貢献してきている。著者の近年の望みは、学生スタッフの地位・

認知度の向上である。日本には既に多くの大学で self-access center が併設されているが、学生スタッフが本学ほど運営に関わり、活躍している大学は著者の知るところでは、ない。そして、入学段階ではごく普通の英語力しかなかった彼らが卒業前には TOEIC の指標でトップクラスの英語力を身につけ、堂々と英語で自分の考えを述べることができるようになる。この贅沢・優秀な教育資源をフル活用して、今後は、大学内外ともに、「すばらしい学生スタッフ」として一目おかれる地位を確立させることが、著者の任務であると考えている。

この場を借りて、The ALL ROOMs 学生スタッフには、日々の活動と私に与えてくれるエネルギーに対して感謝を述べたい。そして、The ALL ROOMs を全面的に支援してくださっている本学学長と教育推進総合センター長・ともに運営してくれている Ben Grafström 氏・様々な事務手続きを行ってくださっている事務の方々に、この場をお借りし、感謝の意を示したい。

引用・参考文献

- 濱田 陽 (2013) The ALL Rooms の現在と未来『秋田大学教養基礎教育研究年報』15, 11-19
- 濱田 陽 (2016) The ALL ROOMs による高大接続プロジェクト『秋田大学基礎教育研究年報』18, 13-17
- 濱田 陽・ベセット アラン・グラフストロム ベン・タッカー ジェイソン(2018). 秋田大学イングリッシュマラソン『秋田大学基礎教育研究年報』, 20, 1-6
- Grafström, Ben. (2014) . Fostering learner autonomy at Akita University: English Programs that Supplement Course Offerings. 『秋田大学教養基礎教育研究年報』16, 19-26
- Grafström, Ben (2015). Autonomy and Borderless Learning Strategies. Akita English Studies. 56, 36-44